あぶらむ通信

第25号　2003年12月　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@kokufu.net
URL http://www.kokkufu.net/~abram/

「土人形　なかよし」
絵　イク　オオゴ

飛騨便り

2003年も晩秋から初冬にさしかかってきました。一年の黄昏時とでもいう時、年に一度となったあぶらむ通信をおとどけします。この通信をお手になさる皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

●落葉と土

この季節の大仕事に落葉集めがある。一本の木はその枝に数十万枚の葉をつけるといわれる。敷地内の道路に落ちた葉はほっておけばタイヤがスリップしたり、腐って水はけが悪くなり何かとやっかい者となる。そこで道路だけの落葉集めとなるわけなのだが、その量たるやぼう大なものとなる。集められた落葉はその年ごとに野積みされ、3年ほどしたところで肥料として畑に還えされる。落葉は肥料となり土となってまた別の生命を育むのである。私たちは身近にあるそんな自然の循環さえ見失なってしまったように思えて仕方がない。

先年、九州福岡の女学院に講演依頼をうけて行った。そこにはおもしろい試みをしている先生たちがいた。その一つに一年間に渡り「土」の絵を描かせている先生がいた。そして「土を描き終えて、自分が感じたこと、考えた事を言葉で表して下さい。」と課題を与えていた。その中で当時中学二年生の穴井祥子さんの詩が私の心に強く残った。

木や花に四季があるように、土にも四季がある。
春はふんわりとした温かい土。花がたくさん咲くのも春の土があるから。
夏は木の蔭の土はとてもひんやりしている。木々がイキイキとした緑が出せるのは夏の土があるから。
秋は枯れ葉がたくさんしきつめられていて土がイキイキしている。土の命は枯れ葉たち。人間の命はやさしい土たち。
冬は北風にまけないくらい冷たい。葉が土になるのは冬の季節があるから。花を咲かせる土を準備する大切な冬の土。

なんと素晴らしい感性、観察力、表現力ではありませんか。こんな眼で身近な自然を見ている若者がいること、大きなおおきな希望です。私たちもそんな若者育てをと、落葉集めをしながら思った私でした。

晩秋の大仕事、落葉集め。
タイヤ・ショベル10杯分にもなりました。

●蕎麦談議

あぶらむの里から西へ片道50km、世界遺産となった合掌の里白川郷へ行く途中に荘川村という山合いの小さな村がある。村には日本一大きな水車がまわり、村産の蕎麦をひいている。「日本一の蕎麦処を目指して」と村民一丸となっている。

私が東京に出たころ、「親の実家が田舎にあって」という人が多かった。自分には帰る田舎があってそこに両親や祖父母が住んでいる、こんな構図はどこか私たちの心の安定剤となっていた。

「田舎の実家」がなくなってから久しい今日、あぶらむを「田舎の実家」とよんでくれる

人が多くなってきた。私たちにとっては嬉しい限りである。そして卒業生の子供たちからは「ジジ、ババ」とよばれるようになってきた。これには少し抵抗感があるもののまんざらでもなく、実はこれまた嬉しい限りである。

そんな田舎の風景には「手打ち蕎麦」が似合う。あぶらむを訪ねて下さった方に「ソバでも打ちましょうか」と一度はいってみたかった。そしてこの春、意を決して「荘川村蕎麦の会」の門をたたくこととなった。

この会はソバ打ちのプロや、プロを目指す人が多い。集まっては黙々とソバを打ち、それを食べ合って批評しあう。ただそれだけだがその後の雑談議がおもしろい。

ソバの話はそっちのけで、昔話や世間話。「子供のころ貧しくて食べるものがなく、春には蛙のたまごをよく食べたもんだヨ。重要なタンパク源だったね。・・・・・それでお前、ガマ蛙のような顔をしてるんだ」なんていう他愛もない会話である。飲むほどに酔うほどにこの種の話のボルテージがあがるのだが、最後は会長の三嶋正さんがしめる。「お前たち、金に目がくらんでいいかげんなソバを打つなヨ。俺たちは一蓮托生なんだからなァ。一人が評判を落とせば、荘川のソバはだめだということになる。そうなったらこの過疎の村で俺たちは生きて行けないのだからなァ。絶対に教えた基本は守れヨ」私は彼のこの一言を聞くために片道50kmの道程を行くようなものである。なぜならその戒めは私たちあぶらむにとっての戒めでもあるからである。

あぶらむの里を訪ねて下さる方は東京、名古屋、大阪と都会の人が圧倒的。なかでも東京を中心とする関東圏からが多い。あぶらむまで来るとなれば交通費と所要時間が大きな負担となる。例えば東京からJR新幹線利用となれば往復３万円ほど、一番割安な高速バスを用いても1.2万円かかる。３万円も出せば韓国や沖縄、北海道へ行ける時代、この交通費の壁は大きい。しかし、それだけ支払ってでも行うという何かを私たちが持ちあわせていなければ私たちはこの地で生きて行くことができないのである。

先行き不透明で将来に不安をおぼえるというあまり明るくない時代、人は多くの出費を重ねてこの飛騨の地まで来て下さるその理由はどこにあるのだろうか。私たちは何を大切にして行かなければならないのだろうか、荘川の蕎麦談議で語られることと同じことがここにもあてはまるのである。

父親が逝って初の法事、私は沖縄から大阪におり列車で故郷富山へ向かった。自分が向かっている田舎の家にはもう父親がいないのだと思ったらハラハラと涙が流れて仕方がなかった。あんなに「寂しさ」を実感したことはなかった。人前をはばかることなく涙していた。

わずかな伝手をたよりに18才で東京に出た私、どう生きて行けばよいのかもわからず、何をしたいのかもわからず、大都会の中でただただ必死にその日その日を生きるだけだった。そんな精神状態の自分を支えていたのは「田舎の風景」だった。自分には帰る処があり、そこにはよく来たなァーといって自分を迎えてくれる人がいて、変わることのない山や川が自分を待っていてくれている。たとえそれが幻想であり安易といわれようが自分が帰ることのできる処、自分を待ってくれてい

収穫された冬野菜と新しくなった農作業小屋

る「田舎」が自分をしっかりと支えてくれていたように思う。幼児虐待や肉親間の殺しあいなどたまらないようなニュースばかりの昨今、身近にある大切なものが分断され一人一人が孤立化して行く時代の中で、ここを訪れて下さる一人一人をしっかりと受けとめる「田舎の風景」を持ち続けることがあぶらむの大切な役割であり、この地で生きて行くことの一つの意味と思う今日このごろです。

●ウィリー（犬）に教えられた老い

これまであぶらむを訪ねて下さった方にはお馴染みのウィリーが9月17日、16年の生を閉じました。近くの宇津江四十八滝へ散歩に出かけられる方をしっかりと案内することを役目としていた犬でした。

昨年までは元気に、山仕事に出かける私に一緒についてきていたのですが、今年になってからは私と行動を共にしなくなってきました。犬は一年間で成犬になり子供を産み始めます。そして「老い」も数ヶ月というわずかな時間で進み、そして死を迎えることを知りました。私はいい年齢をしながらこれまで自分が老いるということは深く考えることはありませんでした。今もどこか他人事のように思っている自分がいます。しかし、短い凝縮された時間の中で「老い」の一コマ一コマをはっきりとみせてくれたウィリー、あなたも自分の老いを考えなさいと私を諭しているようでした。

亡くなる日の前夜、一番よく面倒を見ていた長女が血相を変えて私をよびにきました。「ウィリーどうした」という私の声に彼は薄すらと目をあけ、止まりがちな呼吸を開始しました。「今夜が山だと思うから私一緒に側にいてやる」、娘のそんな優しさにまかせて私は朝までねむってしまった。朝9時過ぎ、高山から通いでスタッフとしてあぶらむを助けてくれている門谷成美さんも揃ったところで、いやあぶらむの全員が揃うことを見計らったかのようにそれまで小康状態を保っていたウィリーの容態が急変した。そしてあぶらむの全員が彼の周りに立った時、彼は目をあけ首を180度静かにゆっくりまわしながら一人一人と目をあわせながら静かに息を引きとっていった。「みなさん、お世話になりました」という彼の声がきこえるような最後だった。

犬のウィリーが見せてくれた立派な最後、果たして人間の自分はその瞬間どのようにピリオド（終止符）をうつのか、ウィリーに大きな課題をもらった瞬間だった。それまで駄犬だァーと思っていたウィリーだったがこの最後の一コマで彼は私の中で名犬になった。

あまり立派な逝き方だったので私は杉の無垢材で棺をつくり、お墓をつくってやった。犬に大きな教え、学びをもらった私でした。

来年は「宝永元年（1704年）」に作られた諸魂庵が築300年の記念の年を迎えます。盛大に祝ってやろうと思っています。

2003年も沢山の出来事がありました。どうぞ新しい年、皆様お一人一人の上に豊かな平安がありますようお祈りいたします。

2003年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

あぶらむを支えて下さっている方々の中でいろんな分野で活躍されている方がいます。
今回は阿久津富男さんに「からだの不思議」というテーマで原稿をお願いしました。
彼は私の立教大学時代の卒業生ですが、その昔ネパールでの活動を一緒にやった仲間であり、現在は鍼灸師・薬剤師として身体の癒しに関わっています。

「身　体　浪　漫」

阿久津富男（はり灸師・薬剤師）

●「気」・・・脈々と流れる生命感

2003年９月15日、星野監督のからだが宙に舞った。阪神タイガース優勝の瞬間であり、ジャイアンツファンの私にとっては一寸むなしい瞬間でもありました。甲子園球場を異様な雰囲気に変えるファンの熱気は阪神の優勝を後押ししましたが、一方では星野氏の監督生命を縮める原因ともなりました。人は目に見える肉体だけで成り立っているのではありません。肉体に宿りそれを動かし生命を営んでいる「気」という存在があるのです。事実、人間の体の最小単位である細胞のほとんどは一年も経たずに死滅して新しいものにものに置き換わってしまい、一年後には別の体となってしまうのですが、それでもその人がその人としてあり続けるのは、この「気」が体に流れ続け生命を繋いでいるからなのです。われわれの日常生活は「気」という言葉で溢れています。身体だけを考えてみても元気、病気、勇気、気持ち、気の毒、気掛かり、強気、正気、色気、等々たくさんあります。甲子園の熱気の正体は一人一人が発した「気」がまとまり共鳴したものであり、それによって選手は勇気づけられ、星野監督は病気になったのです。
「気」の認識は古代中国の周の時代に既に確認することができます。三千年の時を越えて脈々と受け継がれてきた「気」に対する認識は意識すらできないほどにわれわれの生活に溶け込んでいます。

●天地宇宙との連動・・・いつも「お天道様」と一緒

実はこの「気」というものは人間だけに流れているのではありません。「今日のお天気はどうかな」と言うように天にも「気」があり、そして私たちが生活する地上すべてに存在するあらゆるものに流れているのです。古代の人々は、「天に流れる気」、「地に流れる気」、そして私たち「人間に流れる気」を指して「天気」・「地気」・「人気」と呼んでいました。この三つの気は相互に連動し合い天に瞬く星の運行に応じて一年ごとに移り変わり大きく60年の周期を繰り返します。これは干支（十二支）と十干（木・火・土・金・水の陰と陽）の組み合わせに基づくもので、そこから暦が生まれてその年の気候、災害、病気などを占い備えを行ってきました。そして人間で言う六十歳の還暦は60年の周期が一巡して生まれた年の暦に還ることを意味しているのです。
天地宇宙の「気」は親しみを込めて「お天道様」と呼ばれてきました。私たちの体は常に「お天道様」と一緒に変化していますが、この変化に体がついてゆけず病気になるケースにたびたび出会います。
春先の喘息は、外の陽気が高くなるのに応じて体の中から外へ出るはずの「陽気（活動力）」が上手く表に出られず内側にこもって呼吸を乱す場合が多く、五月病と呼ばれる一種のうつ病は疲労などが原因となり、さらに高まる外の陽気に応じるだけの陽気が体内に足りないために生じます。秋には逆に外の陽気が低くなるのに伴って体の陽気も内側に入るのですが、これが上手く入れずに体の側面に鬱滞すると筋肉が引きつる病気や目眩が起こります。梅雨時や低気圧の接近に伴って生じる神経痛は胃腸の働きの弱い人や水分を過剰に摂る人に多く、排泄されずに体内に溜まった「水気」が外の湿度と呼応して「気」の流れを邪魔することに拠ります。これらはほんの一例ですが、この様に私たちの体は天地宇宙の「気」の流れと一緒に変化しており原因がわか

らずに生じる病気の多くがこの「気」の変化に対応できずに生じているのです。

●バランス・・・「病が右にあれば左を取れ」

世の中には男と女がいて昼と夜があり、表の世界と裏の世界があって善と悪があるというように、人間の体も上下・左右・外内・背側腹側があって常に「気」・「血」が巡ってめぐってバランスを保っています。これら二つの要素はそれぞれ大きく「陽」と「陰」に分類されています。両者は別々に働くことはなく、左の脚が悪くなれば右脚がこれをかばい、体の外側が冷えれば内側の熱がそれを補填するように常に相補的に存在しています。

鍼灸の治療原則の一つに「病が右にあれば左を取れ」というものがあります。たとえば右の足首を捻挫した時にその箇所には手をつけず左足の同じ場所に鍼や灸を施して痛みを取るのです。鍼や灸は「気血」を集める道具です。炎症を起こしている箇所は「気血」が過剰に集まって痛みを生じていますから、何でもない反対側に鍼や灸を施し「気血」を集めることで左右のバランスを取るのです。これによって劇的に痛みが消失することがあります。

人間の体温は常に36℃前後に維持されており、これは人間が生きていく上で最適な温度なのですが、ここにも「寒」と「熱」のバランスが働いています。冬になると風邪を引いてなかなか治らず病院で毎日点滴をしても熱が下がらないというケースが時々あります。体は「冷え」が侵入すると適温を維持しようとして熱を生じるのです。風邪の初期の発熱もそうですが、風邪は長引くにつれて体の中深く「冷え」が侵入して、生体はそれに負けじと芯に熱を生じます。気血の衰えたお年寄りは容易にこの「冷え」の侵入を許してしまい芯熱が抜けないことがよくあります。この場合、体の中を温める漢方薬を与えて「冷え」を除くとすぐに熱が下がります。しかし西洋の薬は解熱剤にしろ抗生物質にしろ体を冷してしまい、冷たい点滴はその最たるもので、その結果熱が下がらないということになります。

「気」・「血」にもバランスがあります。「気」は「血」を引っ張り、「血」は「気」の支えとなって常に一緒に巡っています。女性は生理の関係でどうしても「血」の流れが衰えがちで、時に子宮を中心に古い血が滞ることがあります。いわゆる「瘀血」と呼ばれるものです。「血」が滞って流れが悪くなってくると「気」が過剰に働きイライラしたり攻撃的になったりします。本人はあまり気づかないのですが周囲の人が変調に気づき心療内科での治療を薦めるといったことがあります。この場合は「瘀血」を取り除いて「血」の循環をよくしてあげればよいわけで、古代の人々は自然の中からその薬を作りだし今に伝えているのです。

●先人の智慧・・・トリカブトは大切な薬

天地宇宙の「気」は人間だけではなくすべてのものを包み込んでいます。それを知っていた古代の人々は病気になったときに天地宇宙に対して祈りを捧げ、お祓いを行い回復を願いました。人間の周りに存在する植物・動物・鉱物などにも人間と同様な「気」が存在します。特にその中の秀でた「気」を持つものを組み合わせて治療に用いたものが今日「漢方薬」と呼ばれるものです。今から2000年程前の中国、漢の時代にその骨格が出来上がったのでその名があります。

風雪に耐えて生き続ける植物には風寒を退ける「気」が、湿地に棲息する植物には水はけを良くする「気」が、熱帯に育つ植物には熱を発散する「気」がそれぞれ備わっています。何かと話題の多いトリカブトは陰湿な場所を好み人間の体に入ると陰の部分を強烈に温めます。そのため毒抜きの処理を行った上で用量に注意しないと危険です。それでも大切な薬で、手足がひどく冷えて血行が悪く痛みのひどい場合や、体力が低下し体の芯が極端に冷えてなかなか温まらないような場合に効果的に用いられてきた歴史があります。また血を吸って生きている蛭や虻には血を溶かす働きがありますが、牡丹の根や桃の種にも滞った血を流す働きがあり先ほどの「瘀血」を取り除くのに使われてきました。

私が毎日治療に使っている「お灸」は蓬から作られ、血行の促進や免疫力を向上させる働きの他に止血や化膿止めの効果があります。その歴史は「鍼」や「漢方薬」よりも古く今から2500年以上に遡ります。病気を治す力は人間にも備わっています。治療の原点とされる「手当て」は掌を患部に当てて「気」を補うことで治癒を促すものですが、より巧みに「気」を扱うため、或は身体の深い部分を治療するために考えられた道具が「鍼」なのです。

●ロマンチックな未来へ

私たちの体は自然そのものです。肉体という形はあるものの、人間どうしは「気」を通して繋がっており、同様に動物・植物・鉱物などあらゆるものと繋がり天地宇宙の「気」の流れの中にあります。これは一寸不思議な、ある意味素敵なことです。春になれば植物が芽吹くように人間の体も春の体になり、四季それぞれで自然の「気」の流れに応じて変化します。そして季節季節で育まれた動物や植物の命を食することで私たちは命を繋いでいます。「気」と呼ばれるものは実は「こころ」でもあるのです。さらに「気」や「こころ」を発する源は個々の体に宿る「精」あるいは「神」と呼ばれるものです。

私たちから発せられるものには全て「気」が流れ「こころ」が込められています。だから言葉や視線などによって人は喜んだり傷ついたりするのです。

皮肉なことに私たちが便利さや物質的な豊かさを追い求めれば求めるほどこの天地宇宙の「気」の流れを遮るかのような厚いバリアーが築かれてしまいます。その中にあっては一つに繋がっていた糸が切られたかのように個々がばらばらとなり、「こころ」は通い合うことなく暴走し、その結果理解し難い事件が頻繁に生じてしまいます。自然の「気」が希薄な世界は生物としての力を弱らせてしまい「生」と「死」に対する感覚すら歪めてしまっているような気がします。「死」は本来「生」を躍動させ、死ぬことは新たな生にバトンを渡し、天地宇宙の「気」そのものになることだと思います。天地宇宙の「気」の流れと一つであることを感じ「こころ」を通い合わせることは太古の人々が私たちに残してくれた本当の意味での智慧なのかもしれません。そしてその先には現代文明を包み込み天地宇宙の「気」に満たされたロマンチックな未来が開かれているような気がします。

あぶらむの活動は飛騨高山という自然の「気」に溢れた場所で人と人とが向き合い、天地宇宙と人類との間で切れかかった糸をたぐりよせ、「こころ」を繋ぐ働きをずっと続けてきたのだと思います。

そしてクリスマスは天地宇宙の「こころ」がイエス・キリストという「神」となって現れ、私たちと天地宇宙を繋ぐ日なのかもしれません。

阿久津富男の治療院　遊玄洞
〒160-0004　新宿区四谷2-2　佐藤ビル603
TEL 03-3341-9006
E-mail : t-akutsu@nifty.com

あぶらむとアジア ―― ガヴィス奨学基金

●ガヴィス奨学金の経緯

2003年２月18日から10日間、10年振りにフィリピンはルソン島北部山岳州の村サガダを訪ねた。首都マニラからバスを乗り継いで17時間余、太平洋戦争の時ルソン島決戦の戦場となった地域である。

1979年～86年の間、過去の戦争という出来事をふまえて私たちがアジアの人々とどのようにして新しい関係をつくりあげて行くことができるのか、また今日の物質的豊かさの中で私たちが得たもの失ったものは何か、アジアの人々との生活の中で次代を背負う若者達と共に考えてみたかった。

全てが機械化されたマシンパワーの国の私たちは、電気やガス、機械と名のつくものは何もない、あるのはマンパワーだけという国フィリピンで、彼らのように我が身一つ、素手で生きるような場所では実に非力でした。

日本の学生達一人一人が村人の家庭に入り、一週間ほど家族の一員として生活を共にするのだが、家族の助けを借りなければ何一つできなかった。しかしそれにもかかわらず村人たちは私たちを家族の一員としてしっかり支えてくれた。学生の誰しもが「家族」というものを意識したのはこの時が初めてなのではないだろうか。このことに関する逸話を列挙すればきりがない。例えばこんなことがあった。近くのアンタダオ村にホームスティーしていた学生、彼の滞在中に村が「祭（まつり）」に入った。この期間、よそ者は村に立ち入ることは絶対に許されない。

村の長老会議で日本の学生の処遇をめぐって議論となった。村人にとってその年の作物の出来不出来が左右されると信じられている神聖な祭、そこによそ者がいてはならない事。しかし彼のホストファーザー（受入れ家族の主）はこの日本の学生は自分の家族の一員であるといいはってゆずらなかった。「家族の一員をどうして家から出て行けといえようか」と命がけで主張したとその村の牧師が私に話してくれた。結果的には祭りが始まる前に村にいたのだから、村の一員として祭への参加を許すという大岡裁きとなった。

私の住むこの日本の小さな村にあっても、村の総意に異をとなえるということは大変なことを考えると、このホストファーザーの姿勢に胸が熱くなる。

また、こんなこともあった。私たちが村を発つという日、ギナアーンという村から家族が見送りにきた。聞けば朝３時前に家を出たという。この村はサガダから深い谷をはさんで対岸に見える村である。車で行けばぐるーと廻って１時間余。しかしバス代も出せない貧しい家。見送りというその一瞬間のために６時間余をかけて山を越え、谷を越えてきたのである。「家族が旅立つのだから」というその一言に私たちは泣いた。

こんな村人たちの私たちへの思いに、「私たちにも何かできないだろうか」ということで、私たちにできることの一つとして村の子供たちに奨学金を送ることとした。そしてその名を「GAWIS（ガヴィス）奨学金」とした。「ガヴィ

天まで続くサガダ村の棚田

ス」それは彼らの言葉イゴロット語で「良きもの」という意味である。

1979年、私たちが初めてサガダ村を訪ねた時村人の視線は冷たく厳しかった。私は一人の老人に「あの松の木のところで○○が、あの岩かげで××が（日本兵に）殺されたのだゾー」といいよられた。そんな雰囲気の中で学生たちはよく頑張った。帰る時村人は私たちに友好のしるしにといって大きなペナントをくれた。その下に「ADITAKO BOKODAN DI GAWIS」（アディダコ　ボコダン　ディ　ガヴィス）と書かれ、英語で「SHARE THE GOOD」と書かれていた。「良きものを分かちあおう」なんと素晴らしい言葉でしょう。私たちは泣いた。

そうです、大切なことはお互いの良きものを分かちあって生きることです。

そうしてこんな数々の出来事をふまえて「ガヴィス奨学金」が誕生したのでした。

1984年～94年までの10年間、私たちはサガダ村を中心にその周辺７村に奨学金を送ってきた。しかし現地奨学金運営委員の移動やその他の理由で運営が困難となり奨学金給付を一時中断のまま今日に至った。私個人としてもあぶらむの会設立時期でもありガヴィス奨学金に関わることはできなかった。

そんな中昨年の夏、私が担っていたそのプログラムに参加していた卒業生反町真理子さんから奨学金再開の要請がよせられた。彼女は縁あってその山岳地帯の少数民族カリンガの男性と結婚して、現在山岳地帯の村々の拠点であるバギオという町に住んでいる。山の子供たちの修学状況はまだまだ厳しいものがあるので奨学金を再開してほしいということであった。

私としても気になっていたことでもあったのでさっそく昔の仲間たちに相談した。その結果、今後はあぶらむの会の仕事として展開し、奨学金の運営に責任をもってほしいということになった。私たちはあぶらむの会としてそれを引き受けることにした。

そして本年６月、ガヴィス奨学金基金があぶらむの会へ移管され、今後はあぶらむの会の仕事として行われることとなった。

●これからのあぶらむの会とガヴィス奨学金

あぶらむの会に託されたこのガヴィス奨学金は今後、かつてのフィリピン・キャンプの参加者やあぶらむの会を支えて下さっているメンバーを加え、新たな運営委員会をもうけ今後の活動、運営を図ろうと考えている。

しかし、このようなこれまでの流れの中で私個人として次のようなことを考えている。その一つは原資の確保の問題である。私たちがこの奨学金を始めたころは利息が年４～５％という時代だった。そしてその利息の範囲内の運用もある程度可能だった。しかし今日それを期待することは無理である。外国の債券運用という方法もあるかもしれないが、私のような人間には無理な話である。私の考えはあぶらむの経済活動の中でその総収入の３％ほどを基金に組み込むということである。

アメリカやヨーロッパの国では１％クラブ、３％クラブ、５％クラブというクラブがあって、それがその会社の社会的ステータス（地位）となっているという。すなわちそれは利益の１％、３％、５％を社会還元することを表明し、企業活動をしているのである。利益内還元ということになればあぶらむはいつまでたっても不可能なので、私はその総収入（売上げ）の内の何がしかを基金に組み入れてと思っている。

しかしそれは現実問題としては非常に厳しいことであって、あぶらむの会を今日ここまで維持できているのはスタッフの好意に甘え人件費を常識外のレベルにしているからでである。これは健全なことではないことは代表である私が一番よく知っている。あぶらむを支えてくれるスタッフのこと、また会の将来を考え、これはどうにかして行かなければならない重要課題である。この世的にはゼロから事をおこしたあぶらむにとっては仕方ないことであり、宿命的課題である。

しかし、私は安易に世俗的論理に走りたくはない。「あぶらむの会」の設立目的は何であったのか、これを見失ってしまってはあぶらむの存在理由はない。あぶらむの存在意義、それを支えるスタッフの待遇、多くの問題にあえぐアジアの人々への支援、これらのことを考え合わせるとあぶらむの会の健全な経済活動をこれまで以上にのばすことが第一と考えられる。

私たちとしても自分たちの日々の働きがアジアの人々のお手伝いになると思えばこれまで以上にやりがいがでてきます。

私たちとしてはあぶらむの里をもっとこのようなかたちで用いていただきたいと思っています。

・学校単位の里山体験学習プログラム
・学校のクラブ活動の合宿
・教会の夏期キャンプ
・合唱団等各種グループの合宿
・大学のゼミ合宿
・各種グループの合宿研修会
・演劇会、コンサート会場
・親しいお仲間との旅行
・スキー、雪遊び等ウィンタースポーツの拠点として

これまで冬期間は閉ざされていた飛騨地ですが、安房トンネルの開通により東京方面への通年通行が可能となりました。また、新宿－高山の高速バスも早く、便利で経済的になりました。

また、東海北陸自動車道とそれらのアクセス道路の整備により、関西、中京方面がとっても近くなりました。

あぶらむの新しい働きに加わったガヴィス奨学金の記事がいつしかあぶらむの経済活動促進案内（協力願い）にかわってしまいましたが、どうぞ皆様方の一層のご理解とご協力をお願い致します。

フィリピンだけに限らず、広くアジアの国々とどのような関わりのプログラムがもてるのか、新たな報告ができることを願っています。

お／知／ら／せ

○2004年　あぶらむ雪祭り

2004年１月10日(土)～12日(月)

○第８回　子供から大人までのネパールの旅

期間　2004年３月25日～４月５日

○黙想の家「諸魂庵」築300年記念行事予定

・東京芸術大学トランペット科教授
　杉本峯夫　トランペットコンサート
・ウィンフィルハーモニー交響楽団首席チェリスト
　吉井健太郎　チェロコンサート
・深草アキ　秦琴コンサート
・伯　育男　おわら風の盆胡弓演奏会（９月）

※日程が決まり次第ご案内いたします。

2003年あぶらむこの一年

1月・一度は見ておきたい世界の旅、ベトナム世界遺産縦断の旅
2月・あぶらむ雪まつり（8日～11日）
・フィリピン山岳州　ガヴィス奨学金打合せ
・今年の冬はやや暖冬気味（最低気温－12℃）
3月・春一番の会
・第7回子供から大人までのネパールの旅（チトワン自然公園でヒョウに遭遇）
4月・ＪＡ岐阜厚生連　看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
・第10回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
5月・16日田植え
・南山大学人間関係学科合宿
6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
・薪割りボランティア（早雪による雪害のための倒木多数のため）
・韓国大韓聖公会司祭有志のあぶらむ訪問団
・野外バーベキュー場大屋根づくり開始
7月・岐阜生と死を考える研修会
・第1回ツリーハウスワークショップ
・立教大学フィリピン・キャンプ合宿
・各教会夏期キャンプ（名古屋聖マルコ教会、岐阜バプテスト教会、
津聖ヤコブ教会、金沢聖ヨハネ教会青年会）
・野外バーベキュー場大屋根完成
8月・立教小学校探検部合宿
・香蘭女学院ハイキング部合宿
・立教新座中高校里山体験プログラム（3泊4泊）
・第5回あぶらむの里自然体験プログラム「森の恵み」
・國學院大学大崎ゼミ合宿
9月・高山日赤病院看護部研修会
・あぶらむおわら風の盆胡弓演奏会
・ウィリー逝く（17日）
・22日稲刈り
・第2回ツリーハウスワークショップ
10月・4日脱穀（例年の30％減）
・農作業小屋づくり開始、完成
・早目の冬支度開始（薪ストーブの二重煙突取付け等）
11月・逝去者記念式（1日諸魂庵にて）
・荘川村新蕎麦祭り新人揃い打ち
・味噌用大豆、あぶらえ、白菜、大根等　冬用野菜収穫
・本格越冬準備開始
12月・あぶらむ通信発行
・大韓聖公会司祭　金在烈神父引退式出席のため訪韓
・22日あぶらむクリスマス会

※2004年　どうぞよいお年をお迎え下さい

寄付者一覧（'02年11月21日～'03年11月28日）

東京聖テモテ教会奉仕会／根本陽子／祈りの家教会／萩原康宏／松岡和夫／森紀旦／宮城正男・正子／金子美弥子／尾崎和廣／三浦一雄／財満由美子／園部勝・千恵子／大槻カズ子／坂本吉弘／川崎東介／永田亮作／内田篤雄／大城豊次／畑野榮一／津ヤコブ教会／大崎正治／土師晴子／名古屋聖マルコ教会キャンプ参加者一同／西田邦昭／長野純吉／小仲宏／佐藤敏子／室井愛子／鬼本照男・麗子／中村芳枝／八代洋子／小畠誠司／小野成子／北山和民／箕浦純子／野崎久子／鈴木武次／菊澤満喜子／窪寺俊之／松本信代／渡辺洋一／味岡努・敏江／長谷川秀司／山崎俊樹／竹田純郎／岩崎静子／加倉井佳子／髙島富美江／江見淑子／木村富昭・秀子／岸元忠義・静江／朝比奈誼・時子／立教新座中学校ボランティアグループ／岩田牧夫／寺田信一／中村ひろ／鎌田玲子／熊谷一綱／神田キリスト教会／俵里英子／佃寿子／植木由理江／石神耕太郎／久田広子／三原一男・京子／保坂正三／渡辺直明／石田衣子／梶原恵理子／岸井孝司・ミツ子／池崎純一／金城由美子／森田トミ／杁山博・逸子／富山聖マリア教会／雨宮大朔・寿子／市川聖マリヤ教会／星野直子／澤木実枝子／溝際庸介・康子／福岡女学院中学校・高等学校／上田敏明／本田りん／松井明子／畑井正春／常見幸代／又吉亀治／水野洋子／谷章子／鈴木正士／村守恵子／金子内科金子秀夫／森本光生／日本聖公会聖アグネス教会／立教新座中学校・高等学校／武藤六治／工藤真喜子／清水秀明・美保子／松島理恵／鵜川雅行／柏聖アンデレ教会伝道所／伊藤幸雄・陽子／三沢悠子／菊池栄三／紅林みつ子／小林賢三・佳子／友沢加代子

新規会員（'02年11月21日～'03年11月28日）

野添紀子／加倉井誠／関口啓介／河合昇・栄子／北昌子／佐伯忠／永井深雪／岡登信義／伊藤雅敏／中台哲夫・信子／藤波勝久

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。